

## ベニシダ

- ありふれているが難解なシダである - (4月)



ヒメイタチシダ



オオベニシダ

神戸の裏山ではどこにでも生えているもっとも普通のシダである。

4月から5月にかけて、大きな塊状の根茎から葉を一斉に出すようすは壮観である。春の新葉が出そろうまでは、前年度の古い葉は地上に残っているが、夏ごろには古い葉は地上にたおれ、新しい葉と完全に交代する。新しく出た葉はあざやかな緑色で、ややかたい感じがする。

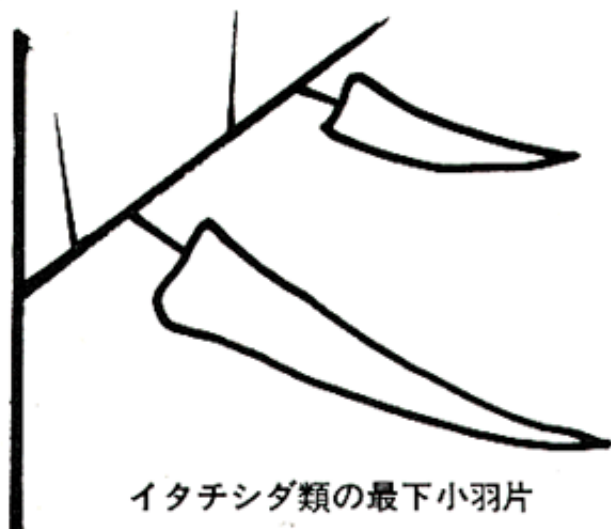
若葉のころは全体が紫赤色から赤褐色である。それは葉はもちろん、葉柄、葉柄につく鱗片まで赤くなる。さらに胞子のうをおおう包膜も美しい紅色をしている。たしかにベニシダと呼ぶにふさわしいシダである（裏表紙参照）。

ベニシダの若葉を広げていくときの葉の色の変化はみごとである。葉（羽片）が広がっていくにつれて、広がった下部の羽片から順に黄味を帯びてくる。広がりきっていない羽片の縁はまだまっ赤である。葉を広げきるまで赤い葉柄と葉面の先端部・小羽片の縁の紅と、その他の部分の黄色とがみごとに調和し、展開していく。葉がほぼ緑になっていっても、包膜だけは赤味を帯びている。初夏のころ葉面が緑色一色になると、包膜の赤さも消え、他のシダとの区別がいよいよ困難になってくる。葉の全体の形が狭くて長いもの、反対に広くて短いものなど多くの形のものがあり、種類の多いベニシダの類は実際、正確に区別することほ大変困難である。

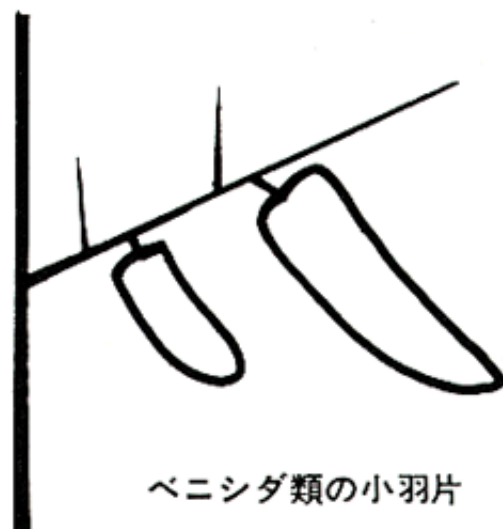
例えば、よく似たサイゴクベニシダは、新しい葉が出るときは黄味がかかった白い軟毛状の鱗片をつけており、葉も包膜も黄味を帯びているので区別できるし、成長した葉ではベニシダやこの類の他のものと比べると鱗片が多く、葉柄・中軸ともに鱗片が密についていること、葉は黒っぽいほどの緑色を帯びていることなどで違いがわかる。

もっといろいろな点でよく似ているものにトウゴクシダやオオベニシダがある。トウゴクシダはベニシダの羽片がさらに深く切れこんだものであり、オオベニシダはベニシダと比べて葉の幅が広く、下部羽片は深く切れこんでいるなどで区別できるが、なれないうちは実物を手にして図鑑と首っ引で調べなければわからない。

そのうえ、このベニシダの類の仲間分けに入る前にまだベニシダとイタチシダの類との区別が必要なのである。



イタチシダ類の最下小羽片



ベニシダ類の小羽片

おおまかなベニシダとイタチシダの区別点を挙げておこう。

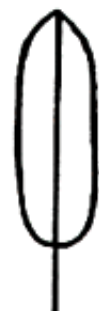
1. イタチシダの類は一般に葉柄に黒色または黒褐色の鱗片が密生する。ベニシダの方は黒褐色または褐色の鱗片であり、サイゴクベニシダ・マルバベニシダ以外は鱗片が密生することが少ない。
2. イタチシダ類は最下羽片が一番大きく、とくにその下向きの第一小羽片は大きく突出する。ベニシダも多少この傾向はあるがイタチシダの類ほど極端ではない。
3. イタチシダ類の葉はややかたい草状であるのに対して、ベニシダの方はややうすく紙状のものが多く。

第一話のシダの説明から、複雑な迷路に誘いこんだが、ベニシダの属するオシダ属のシダが少しわかってくると、前途には光がさしてくる。

ここでは図を見て、シダの部分の名称を知っていただきたい。

### 葉の形

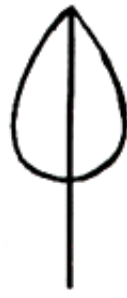
葉身の全体の形を見るときは単葉ならそのままだが、複葉なら、羽片の先端を結んだ形で示す。形は長さとの比と最大幅の位置で決まる。基本の形としては次のようなものがある。



長楕円形



楕円形



卵形



長三角形

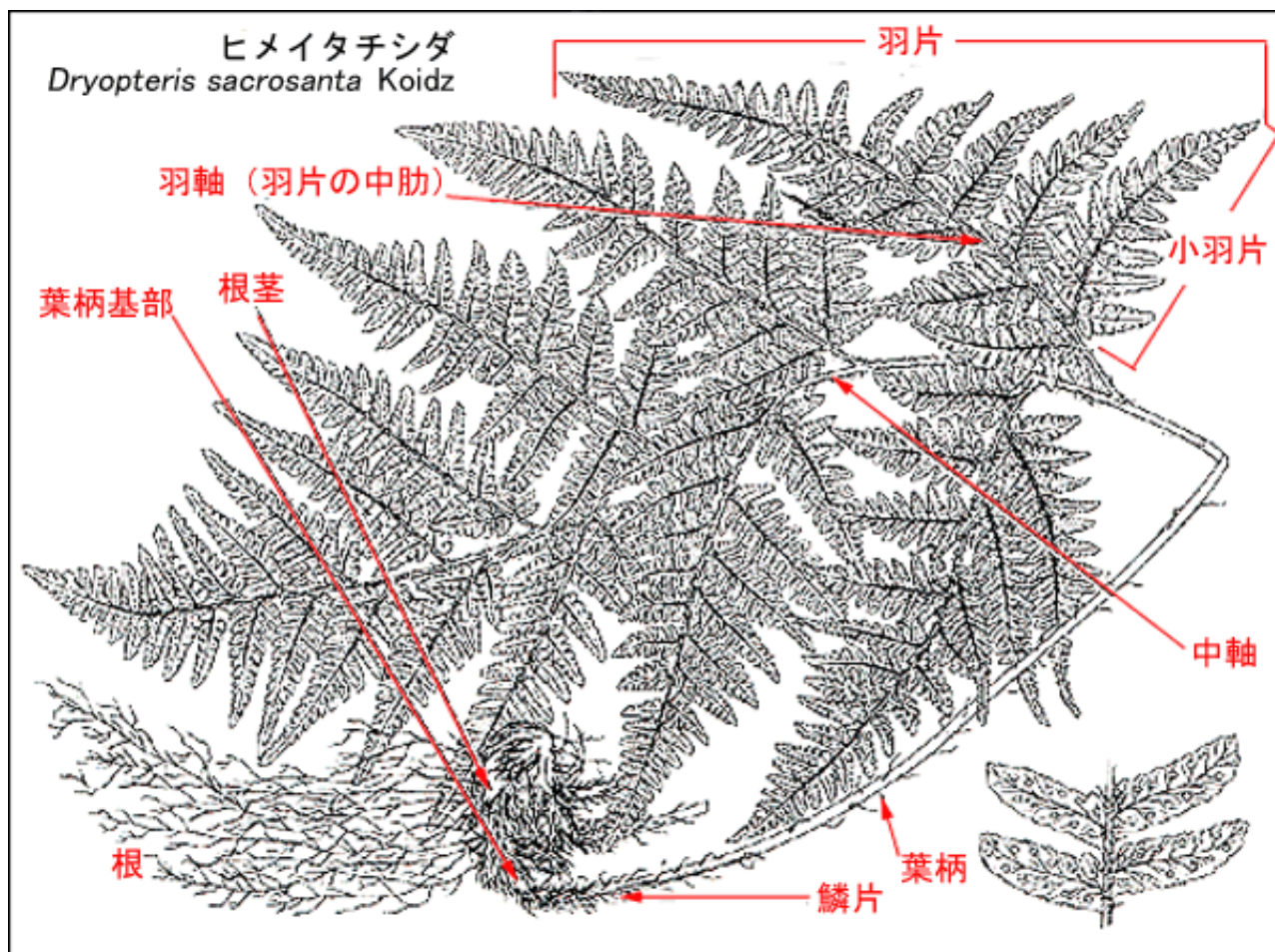


皮針形



線形

実際には、さらにこれらの形を組み合わせたか、倒・広・狭などをつけて使うことがある。



## 葉柄の観察

長さ	・長いもの、短いものがある、
太さ	・普通のもののは細い、
硬さ	・かたくて丈夫 イヌガンソクの <b>実葉</b> など。 ・強いオシダ・カナワラビ・イノデ属のものなど。 ・もろいシケチシダ・メシダ属のもの、
色	・普通のもののは茶褐色、黄褐色。 ・紫黒色 クジャクシダ属。 ・暗紫褐色から赤褐色 チャセンシダ・ハリガネワラビなど、
形・溝	・丸い (ホングウシダなど) ・四角形 (エダウチホングウシダ)。 ・溝の深いものシケチシダ属、
翼	・コケシノブ科、チャセンシダは <b>翼</b> がある、
葉柄基部	・扁平状 ギジノオシダ・ <b>托葉</b> 状の <b>翼</b> ゼンマイ、 ・肥厚した <b>葉枕</b> リュウビンタイ、
鱗片・毛	・普通は平面に広がる <b>鱗片</b> や細胞が1列の毛でおおわれている (形・色・大きさは異なる)。 ・ヘゴの <b>鱗片</b> は棘状突起のさきについている、

## シダの葉の働き

シダの葉には2つの働きがある。

第1は、水と空気中の二酸化炭素を材料に日光をエネルギーとした同化産物をつくる。第2は、[胞子のう](#)をつけて胞子をつくり、これを散布して次の代のシダをふやすことである。

多くのシダは、同じ葉でこの2つの働きをしているが、[胞子のう群](#)をつけた葉とつけていない葉は同じ形をしているので、その葉に[胞子のう群](#)がついているかどうかは、いちいち葉を裏がえしてみないとわからない。

しかし、そんなシダでも、[胞子のう群](#)のたくさんついている葉とつけていない葉を比較してみると、よくついていた葉はつけていない葉と比べると[葉柄](#)が長く、葉身は長さの割に幅が狭く、葉肉の部分が縮小している傾向がある。

この傾向がさらに強くなるとハクモウイノデ・ハリガネワラビのように[胞子のう](#)をつける葉は[葉柄](#)がうんと長くなったり、ヒトツバのように葉の幅がはっきり狭くなる。

[裸葉](#)（[栄養葉](#)）と[実葉](#)（[胞子葉](#)）に分かれるシダ

シシガシラ・ゼンマイ・クサソテツ・コウヤワラビ・オサシダ・イヌガンソク・キジノオシダ・オオキジノオシダ・ミヤマシシガシラ

[裸葉](#)・[実葉](#)が草丈・葉面の幅で区別されるシダ

セイタカシケシダ・ハクモウイノデ・ヒメシダ・コバノカナワラビ・ホソバカナワラビ



デジタル化 神戸の自然シリーズ3 神戸のシダ 総合メニューへ